

情報工学科 2024年度 第2回 教育課程編成委員会議事録

1. 日 時：2025年3月11日（火） 14時00分～15時00分

2. 場 所：YIC 情報ビジネス専門学校 2階 応接室（Zoom ミーティング）

3. 参加者：阪上 誠 様 （株式会社テクノプロ テクノプロデザイン社 新卒採用部部長）
吉田 典子 様 （株式会社ビーアライブ 取締役）
高嶋 勉 様 （株式会社フォーラム 山口オーグメンテーションセンター
HR 本部 HR 室 マネージャー）
長畑 勉 様 （一般社団法人山口県情報産業協会 会長）
河津 道正 （副校長）
杉林 伸繁 （特任部長）
日當 泰浩 （事務長）
森野 茂弘 （教務課長）
柳川 小次郎 （情報工学科 学科長）
田中 梓 （情報工学科 教員）

4. 議事

5. 河津：副校長挨拶

6. 柳川：2024年度の成果報告について（別紙A、別紙B、別紙Cに沿って説明）

7. 柳川：2025年度の目標について（別紙Dに沿って説明）

8. 質疑応答：

8. 1 退学防止について

長畑委員：退学防止で一定の成果があったという具体的な施策は、もくもく会だけか。

それ以外に、なにか取り組みはあるか。

田中：今年度、1年生は学生と担任の面談を2回（入学後と後期）、保証人を含めた三者面談を2回（夏休み、進級前）の計4回実施した。学生だけではなく保証人にも情報工学科の学習内容や就職活動についても情報を共有できたことは大きかった。

長畑委員：これまではこういった面談はなかったのか

柳川：昨年は全員に対して面談は行っておらず、面談希望の保証人に対してのみ実施した。ただし、学生が保証人に三者面談などの学校行事を伝えていない事例もあった。

出席日数が不足し留年（退学）した学生の保証人は、子供が学校へ行っていないことを知らなかったケースが多かった。

高嶋委員：退学率は5.3%という報告があったが、目標値はあるか。

柳川：YICグループ全体の退学率 目標は3%以下。

情報工学科は退学率が高い学科になっており、特に一年生の退学率が他学科と比べると顕著に高い。

例えばペット総合学科ではトリミング実習など高校生が学びたかった内容を入学後から学ぶことができる。情報工学科の場合、入学直後は国家試験の勉強ばかり続くので、期待していた学びと違うギャップがある。

2年生と3年生の退学は、勉強についていけなくなったことが原因。勉強についていけないから楽しくない。楽しくないから学校に行かない。学校に行かないから、ますます授業についていけなくなるという悪循環の結果。

阪上委員：退学率というのが企業でいう退職率だと思っており、すごく気にしている。

私は技術職に向いていません、エンジニア職に向いていませんという言葉を残して、退職を決意される割合が年々増えてきている傾向にある。入学前のイメージと入学後のイメージが違うというのも似ている。

実際にやってみたら違うという点については産学連授業などで何かメッセージを出すことができるのではないか。エンジニアは面白い仕事であることや、学ぶことでどのような未来があるのかを産学連携授業で伝えたい。

8. 2 基本情報技術者試験受験について

高嶋委員：1年生の基本情報受験者が少なかったということだが、ある程度強制的に受験させ、たとえ不合格であったとしても何か学びになるところはあるのではないかな。

学校として、まず受験させるというスタンスなのか、合格できるレベルになってから受験させるというスタンスなのか。

柳川：5月の時点でバウチャーチケットを配布しているので、1年以内に絶対に受験させるスタンスになる。

科目A免除試験も12月と1月の2回受験することができるが、免除試験前でも合格できるというのは伝えている。先輩たちが何時、国家試験を受験して合格したのかを確認して、自分にも出来るとチャレンジしてもらいたかったが、今年はチャレンジする学生が少なかった。

8. 3 オンラインもくもく会について

吉田委員：オンラインもくもく会について質問がある。参加するのは平均4名、最大8名ということだが、参加する学生は固定されているのか。

田中：ほぼ固定はされているが、たまに飛び込みで参加する学生もいる。

吉田委員：エンジニアとして成長していくには、自己研鑽が非常に重要だと思う。学生の中から、自分から勉強する習慣を身につけ、勉強が面白いという感覚をつかんでもらえ場を提供するのはとても重要。取り組みとして素晴らしい。

学生が固定してしまっているのではないかと心配であったが、自己研鑽が苦手なタイプの学生も時々でも参加しているというのは非常によい。ぜひ継続をしていただきたい。

8. 4 すららによる朝学について

長畑委員：国語力を高めたいとのことだが、具体的にどのあたりの低さが気になるのか。また、授業でそこを工夫して補うことはしているか。

柳川：文章が読めないし書けない。大事な言葉をノートに書かせたり、教科書に書かれている説明文を自分の言葉でアウトプットしたりするトレーニングを実施している。しかし、最近はそれすら難しいレベルの国語力しか持っていない学生が多いと感じる。そこで、オンライン教材を使った個別カリキュラムによる学び直しの機会を提供している。

杉林：高度情報処理試験の対策授業というのは、文章書く授業でもある。高度情報処理試験合格を目指す学科というのが最初のコンセプトであり、それに近づいていけるように、まずは短い文章を 30 文字、40 文字で答えていくことを繰り返し、気がついたら 3200 文字の文章が書けるようになったというところまで持っていきたい。

8. 5 生成 AI の授業について

阪上委員：生成 AI について色々調べているということだが、他の学校はどのような取り組みをしているのか。

柳川：おそらくやってない。YIC が最先端を走っていると思う。

阪上委員：他校に先んじてやっている点は YIC の売りになるし、可能性があると感じた。

吉田委員：生成 AI に関して学科の中でどのような位置づけで学ばせるのか。

今、エンジニアは生成 AI を利用しないのはありえないといった感じで活用している。プログラミングをする時、まず生成 AI でソースコードを作成させ、それを参考にしつつ自分でプログラミングをしている。この部分のコードは使う。この部分は自分で書き直すといった業務効率化を当たり前のように行っていると聞く。

実際、企業でエンジニアが生成 AI をどのように活用しているのかヒアリングしても良いのではないかと思った。

柳川：確かにそうで、ぜひヒアリングを行いたい。

指導する点で悩ましいのは、AI にプログラミングさせる技法を教える事で、学生が苦労しながらアルゴリズムを考えたり、デバッグしたりする作業をしなくなるのではないかという事。

AI を活用する上で、必要なスキルが何であるのかは試行錯誤で探している段階。2028 年までには何らかの指針が出ると思うので、参考にしながら教育課程の変更も考えたい。

9. 決定事項

- 新教育課程でアルゴリズムの授業を減らしたことがどのような影響を及ぼすのか検証する。
- オンラインもくもく会ならびに勉強計画表作成の継続。
- すららによる朝学については、最低 3 年はかけて学習成果を見極める。
- エンジニアに生成 AI をどう活用しているのか話を聞く機会を設ける。

10. 次回の開催

2025 年 9 月予定